



Title	『純粹理性批判』における判断表の完全性をめぐって : K. ReichとR. Brandtの解釈
Author(s)	森, 芳周
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2003, 37, p. 17-29
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6587
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『純粹理性批判』における判断表の完全性をめぐつて

— K. Reich と R. Brandt の解釈 —

森 芳 周

カントの認識論において、経験的認識は感性と悟性という二つの認識能力によって形成される。感性においては空間と時間という直観の形式が、そして悟性においては純粹悟性概念すなわちカテゴリーが働いている。このカテゴリーの表に関して、その概念に与えられた機能と完全性の根拠とそれらのものが判断表 (A70/B95) である。しかし、カテゴリー表が由来する判断表の説明はあまりに説得力に欠けている。判断表の諸契機の起源、完全性などに疑問符がつけられる。だが判断表の完全性を積極的に証明しようとする試みも少なくない。その解釈者の代表的な存在として、ライヒ (K. Reich) や ブラント (R. Brandt) ⁽¹⁾ がいる。しかし、それらの解釈者が必ずしも一致した意見を表明しているわけではない。特にライヒとブラントは、カントの判断論の基礎づけ、判断表の完全性の解釈に関して意見が大きく異なる。本稿の目的は、この両者の解釈の相違点を明確にして、その相違がどこに由来するかを示すことである。そして、そこで示された解釈がさらに『純粹理性批判』(以下、「批判」と表記する) の解釈の上に適切に位置づけられるかどうかを検証する。本稿の議論は次のよき順序で行われる。まず第一章では、

判断表に批判的な立場を取る解釈者たちの主張を見て、判断表の問題点を明確にする。第二章では、ライヒおよびプラントの判断表解釈を見て、両者の相違点を浮かび上がらせる。第三章において、統覚と判断の問題を扱う。判断表と統覚、形而上学的演繹と超越論的演繹の関係の適切な位置づけが、原則論、弁証論などの適切な解釈のためにも必要であることを示す。

一 判断表の問題点

判断表は論理学の判断を量、質、関係、様相というタイトルの下に配置したものであるのだが、カントはこの判断表が過去の論理学者のできあがった表をもとにしていると述べる。しかし、カントの判断表は一八世紀の論理学者のどの判断表とも異なる。ここでまず起こる批判は、スミス (N. K. Smith) のような批判である。スミスはまず、過去の論理学の表と一致していない点を指摘し、さらに過去の論理学では一般論理学が扱われており、カントの判断表の論理学は超越論的論理学であるはずであるから、そもそも過去の論理学の表を参照すること自体がおかしいとする。また、現代の論理学の立場から、論理学の判断諸契機は相互に置き換える可能があるので、その場合どの要素をプリミティブとするかは個々の論理学者によっているとして、この判断表が完全な表ではありえないと批判するのが、ストロークン (P. F. Strawson) である。⁽²⁾

また新カント派のコーヘン (H. Cohen) は、判断表にスミスと同様の批判をして、さらに次のように述べている。「カテゴリーと判断は、諸認識の内容の実質的な差異にも関わらず、諸認識の一貫した共通の基本的特質を示す型紙でしかない。しかし、この認識の価値と根拠は、本来的に心理学的なこの表現にあるのではなく、諸原則におい

『純粹理性批判』における判断表の完全性をめぐって

て生じる枠組みにある。諸原則において有効であり妥当するカテゴリーを、そしてそれだけの数のカテゴリーをカントは選び出した。原理と規準は諸原則にある。」⁽³⁾ コーエンは、分析論をニュートン物理学の基礎づけと解釈し、原則論を最高点に置く。カテゴリー表の起源が判断表ではなく原則論とされる。コーエンとは逆の立場にいるハイムゼート（H. Heimsoeth）は、カテゴリーが形而上学的な起源を持つことを論じているが、⁽⁴⁾ コーエンもハイムゼートとともに、判断表そのものの価値については認めるとはない。

それに対し、ライヒ、ブラントが判断表の批判者に対してどのような態度をとるか見ておきたい。まずカントの判断表と一八世紀論理学の判断表との相違についてだが、その相違については争うことができないよう思われる。ただしライヒ、ブラントともに一般論理学は分析判断を扱い、超越論的論理学は総合判断を扱うというように判断形成の方法が区別されるということには反対する。一般論理学が分析判断のみに関わると主張するのは、「分析的」という用語を「分析的認識」という最狭義の意味でしか解さない不正確な定式化に基づいているとライヒは言う。そして、ライヒは統覚に基づく、独自の導出方法によって判断表の完全性の証明を行う。それに対して、ブラントはカントが判断表に使用する論理学はカント自身の著作の中でのみ通用する論理学であるとして、判断表が前批批判期から歴史的に生成することを示し、スマスらの批判をかわす。この両者の試みと対立点については次章以降で詳しく述べる。ライヒは、コーベンおよびハイムゼートのような批判に対して、統覚に基づく判断の結合規則を解明することにより、判断表の判断の意義を説く。また、ブラントは『批判』の概念論、判断論、理念論、方法論という構成と判断表の構成規則との密接な関係を明らかにして、『批判』構成上の判断表の重要性を説く。

二 ライヒとプラントの判断表解釈

（二）では、両者の差異の本質に迫り、そこから妥当な議論を導くことを目的とする。まずライヒの試みについて検討し、その後、プラントの試みを彼によるライヒ批判という形で、対立点がより明確になるように論を進めたい。ライヒによる判断の定義において重要なのは、演繹論第一六節の注の次の部分である。「統覚の総合的統一は、すべての悟性使用が、全論理学ですら、そのあとでは超越論的哲学がそこに結びつけられなければならない最高点である。」（B134 Ann.）ライヒは、これを判断の定義として導入し、（二）で規定された「統覚の客観的統一」を原理として、そこから判断の諸契機を導出することを試みる。だが、これはカントがまつたく行つていな議論である。ライヒはどうにしてそれを行うのだろうか。

ライヒの判断諸契機の導出は、まずライヒ自身の考えに基づいて行い、それをカントの遺稿において裏づけていくという方法を取つてゐる。（二）では前者のライヒ自身の考えに基づくものに絞つて話を進める。ライヒによると、最初に導出される判断は「SはPである」という形式で表される定言判断である。判断が形成される以前には概念しかなく、概念はそれ自身では客観的妥当性をもたないし、対象の認識のために働くこともない。概念が認識のために働くためには、条件となる別の概念が必要である。その条件となる概念と条件づけられる概念との関係が定言判断であると考へる。条件となる概念が主語となり、条件づけられる概念が述語となる。ライヒによる（二）で統覚が働く。單なる外延関係による概念間の従属関係ではなく、概念の意識の客観的統一による従属関係によつてこそ、どちらが主語となり、どちらが述語となるかが決まる（⁶）。概念と概念の関係だけでなく、

『純粹理性批判』における判断表の完全性をめぐって

概念の関係の関係も対象の認識を構成するものと考えられる。したがつて様々な定言判断が意識の客観的統一へと結合されると考えることが可能でなければならない。そして「ある思惟が、別の思惟が現実的に妥当する条件となる。」これが、仮言判断とよばれる判断となる。概念が内容に対する関係をもつてゐるが、その関係 자체について客観的に妥当するとは規定されていないような思惟である。定言判断において考えられている概念の関係が、客観的に妥当するかどうかが未規定である形式も導出されうる。判断とは定義上、客観的に妥当する思惟の関係である。概念の関係の客観的妥当性が未規定であるような蓋然判断というのは、判断ですらない。したがつて、蓋然判断が客観的妥当性をもつかどうかを決定する関係において、蓋然判断を考えなければならない。そのためには蓋然判断の統覚の客観的統一への関係が与えられなければならない。蓋然判断は、それ自身で客観的妥当性をもつかどうかを決定する条件を構成し、「全体として」認識を構成する。全体のどの部分も客観的妥当性を持たないので、蓋然判断は相互に規定しあわなければならない。これによつて対象の認識を構成する。これが選言判断である。以上が関係のタイトルの下におかれる二つの判断である。

様相の判断は、選言判断の内容を見ることによつて得られる。全体としては真である選言判断の内容を形成する、個々の選言肢の判断はそれ自体では蓋然的であり、ある条件の下では、選言肢の一つが真でなければならず、その判断は必然的であるか、または必当然的である。

量と質の判断は次のように発見される。⁽⁸⁾すべての判断の論理的形式は判断のうちに含まれてゐる諸概念の統覚の客観的統一にある」(B140)といふことが判断の定義であつたが、「判断のうちに含まれてゐる諸概念」を考慮することによつて、判断の質と量が生じる。質における肯定と否定は、選言判断にもとづく。選言判断の選言肢の一方

が肯定されれば、他方が否定される。これをライヒは質における肯定判断、否定判断の源泉としている。⁽⁹⁾ また量に關しては、判断の普遍性と個別性によつて区分されるとしている。

以上がライヒの判断表の導出の方法である。このライヒの試みの特徴であり、問題点と思われるは、第一に、統覚を「最高点」に位置づけること、そして第二に、判断表の完全性を示すために、「統覚（自己意識）の客観的統一」から具体的に判断表の諸契機を導出してみせることである。この解釈に対するブラントの批判と彼の判断表解釈を見ていくことにしよう。ブラントは「ライヒが基本綱領として必要としていること、すなわち、論理的形式が、超越論的自己意識あるいは統覚への関係から導出されうるとは、カントは言つてはいない、ただ任意の諸表象の集合的統一と認識（すなわち判断）の論理的形式が超越論的意識への関係に基づいているというだけである」と述べる。そしてブラントは次のような判断の定義を導入する。「判断は対象の間接的認識であり、したがつて対象の表象の表象である。」(A68/B93) 彼によれば、判断表における判断の定義の際に、統覚への言及は避けるべきである。なぜなら、統覚への言及は超越論的演繹で初めてなされるのであって、判断表の導出では一切触れられていないからである。したがつてブラントは判断の定義における統覚への言及を一切拒否する。このことは次章で詳しく検討する。

さらに、統覚からの導出過程においても、ライヒの試みがカントの議論と一致していないことが示される。与えられた概念の統覚の客観的統一という前提（判断の形式の定義）に基づいてまず定言判断が導出されるが、ライヒはこの定言判断を、判断表のその他の諸契機すべてがそこから導出される根源的な判断として設定し、この定言判断からいわば連続的に（ライヒ自身の言葉で言うならば「分析的に」）、その他すべての判断が導き出される。それ

ゆえ、関係の判断が特殊な地位に置かれる。だが『批判』においては様相の特殊な地位については繰り返し述べられているが、関係についてはそのような記述を見出すことはできない。また様相の判断形式は、形式論理学の枠内では基礎づけられえないものである。ある命題の論理的可能性、現実性、必然性は、命題に先立つて置かれる判断ではなく、認識判断に内在的な規定である。つまり、量・質・関係が判断を構成し、その判断が様相のタイトルの下で完全にされ、認識全体を構成する。

さて、それではブラントの主張する判断表の諸契機の発見の方法はいかなるものだろうか、そしてその完全性はいかにして保証されるのであろうか。ブラントは、判断表の解釈のために、判断表自身の手引きと説明のみが用いられるとする。⁽¹⁾ そして、それを一七七〇年代から八〇年代の講義録や遺稿から基礎づけるという方法を取る。テキストへの忠実さを厳格に守り、『批判』初版すでに提示されている判断表の基礎づけに、第二版の超越論的演繹を使用することも拒否する。ブラントにとって判断表の課題とは「あらゆる純粹悟性概念に対して、しかるべき位置とその完全性がアブリオリに規定される規則を提供する連関を作成すること」(A67/B92)である。カントは「論理的悟性使用一般」の節で次のように述べる。カテゴリーはそれ自体悟性から生じているが、人間がそのような統一の機能を認識することはできない。しかし、悟性の機能は判断に還元される。それゆえ、判断における統一の機能を完全に示すことができるのであれば、悟性概念も発見されうる(A69/B94)。

ここに、ライヒとブラントの大きな違いが見られる。ライヒにとって判断表は、判断を統覚の下に基礎づけることによって体系的に完成されるものであった。しかし、ブラントにとって、判断表の諸契機は、判断の基礎づけ（超越論的演繹）以前に与えられているものである。そしてブラントの判断表解釈の目的は、カントが与えられた諸契

機をいかにして配置したのかといふ体系形式の発見にある。さて、この解釈の差が『批判』のテキスト解釈のどゝから発生しているのだろうか。次章では、このことについて議論したい。具体的には、『批判』の二つの演繹、すなわち形而上学的演繹と超越論的演繹それぞれの判断論の課題を明確にしていくことになる。

III 二つの演繹と判断の定義

ライヒによる判断の定義では、なぜ統覚が重要な位置を占めるのか。プラントも指摘するよつて、『批判』における統覚への言及は超越論的演繹において初めてなされる。しかし、ライヒは形而上学的演繹においても統覚への言及を認めるのである。それは、次の解釈によつている。「諸表象が概念へと変ぜられるのは、分析的に行われる」(A76/B102) あるいは、「悟性は概念において、分析的統一を介して、判断の論理的形式を成就する」(A79/B105) という記述における「分析的（統一）」を、超越論的演繹における「意識の分析的統一」(B133 Ann.) と同一のものとみなす解釈である。そして、ライヒは判断における分析的統一と客観的（総合的）統一の位置づけについて次のようと考える。

諸表象が概念に変ぜられるといふのは、やまやまな表象を一つの共通の表象の下へと置く作用によつて行われる。ここで一つの共通の表象と言われているものが、共通概念 (conceptus communis) である。ところでも、やまやまな表象における意識の同一性の表象が意識の分析的統一であり (B133)、この分析的統一によつて、やまやまな表象のうちで、ある共通概念を表象することができるるのである (B133 Ann.)。ただし、この共通概念は、普遍的な概念、すなわち純粹悟性概念ではない。⁽¹²⁾ こうして得られた共通概念が結合されることによつて、判断を形成するのである。

『純粹理性批判』における判断表の完全性をめぐって

基本的には判断は「二つの概念間の関係」(B140)であるが、その関係が「諸表象の連想による意識の経験的統一」(B140-1)、「意識の主観的統一」(B140)から区別されるために、「すべての判断の論理的形式は判断のうちに含まれている諸概念の統覚の客観的統一」(B140)のうちになければならない。⁽¹³⁾

またカントによれば、共通概念の表象すなわち意識（統覚）の分析的統一は、すでに統覚の総合的統一を前提にしている(B134)。なぜならば、異なった表象における意識の同一性は、諸表象の多様なものを一つの意識において結合する」とがであると云ふことを前提にしているからである。つまり、ある表象に伴われている「私」とまた別の表象に伴われている「私」が同一であるという分析的統一は、それら諸表象を「二つの自己意識に合一せしむ」とができる。(B134) という統覚の総合的統一を前提にしている。

以上が超越論的演繹における分析的統一と総合的統一の位置づけであり、ライヒが根拠としている判断論である。判断における二つの統一がすでに形而上学的演繹でも前提とされていると、ライヒは考へていて。すなわち、判断表における判断もすべて統覚の総合的統一によって形成されており、客観的妥当性を持つ判断が扱われている。この主張である。ブラントが指摘する、ライヒの判断論の一番の難点は、ここにある。超越論的演繹と同様、形而上学的演繹においても判断の定義には統覚への言及が必要だという主張を、ブラントは「循環的」と批判する。⁽¹⁴⁾ 判断の定義において統覚が用いられ、さらに判断の基礎づけにおいても統覚が再び用いられるからである。このことをもう少し詳しく説明しておこう。

判断表の判断論の役割は何だろうか。それは、純粹悟性概念の発見の手引きとなるような論理学の諸判断、悟性の論理的形式を示すことである。そしてそこから得られる純粹悟性概念は、悟性の概念であつて、感性とはまつた

く切り離されている。それゆえにカテゴリーの客観的妥当性が問題とされる超越論的演繹が必要なのである。つまり、なぜ純粹に悟性的な概念が感性的な多様なものに適用されうるのかという課題が発生する。その課題を解くためには提出されるものが統覚である。直観への関係は、あらゆる表象に伴う統覚の統一の問題である。これがすでに形而上学的演繹で語られているとしたら、説明が循環している。プラントはこのことを指摘している。判断表の判断が客観的に妥当な判断であるならば、すでに直観への妥当性をもつことになるのである。そして、形而上学的演繹の「形而上学的」の意味について、「空間概念の形而上学的解説」や「判断力批判」で使われる意味に解して、「与えられた何かあるものへと立ち戻ること」という意味で使われているのだと指摘する。⁽¹⁵⁾

さらに、ライヒの主張によると、判断表がすでに直観への適用を前提としているならば、カテゴリーもその適用を前提していることになる。そうすると、結局はライヒの判断の定義は、コーエンあるいはスミスの解釈と同様に、諸原則までしか射程に入れられないことになる。「対象を思考することと、対象を認識することは、同一のことではない。つまり認識には一つの要件が属しており、第一には、対象がそれを通じて思考される概念（カテゴリー）、また第二には、対象がそれを通じて与えられる直観が、それである」（B146）とカントが述べるように、カテゴリーだけでは客観的妥当性を持つ認識を得ることはできない。つまり判断表の判断も客観的妥当性を必ずしももつものではないのである。以上のような理由から、ライヒによる統覚からの判断表の諸契機の導出という完全性の証明の試みは拒絶されなければならない。

『純粹理性批判』からの引用は、慣例に従つて初版ア'、第1版ア'の頁数を表示する。他の引用は、その都度出典を文末の注によることで表示する。

- (1) K. Reich, *Die Vollständigkeit der kantischen Urteilstafel*, 1932, 2. Aufl. 1948. R. Brandt, *Die Urteilstafel. Kritik der reinen Vernunft* A67-76; B92-201, 1991. ベルギー B. Longuenesse, *Kant et le pouvoir de juger*, 1993. M. Wolff, *Die Vollständigkeit der kantischen Urteilstafel: mit einem Essay über Freges Begriffsschrift*, 1995. なんざあくべくの著作を除いて、いわゆる一九九〇年代に出版されたおおきい判斷表解釈が現在でも大きな問題である。
- (2) ベルギーベルローハによる判斷表批判については、すでに論じたところであるので、以下は主に論議上の触れなご。森芳周「カハム「カトナーレの体系」における判斷表はいかに」(『メタ・ヒンカ』第111号、1100年)を参照。
- (3) H. Cohen, *Kants Theorie der Erfahrung*, 1871, 3. Aufl. 1918, S. 346.
- (4) H. Heimsoeth, Zur Herkunft und Entwicklung von Kants Kategorientafel, in: *Studien zur Philosophie Immanuel Kants II* 1970, S. 109-115.
- (5) Vgl. Reich, *a. a. O.*, S. 15.
- (6) Vgl. Reich, *a. a. O.*, S. 47.
- (7) Reich, *a. a. O.*, S. 49.
- (8) Vgl. Reich, *a. a. O.*, S. 57-9.
- (9) 「制限評論の導出は」 論理評論の中心命題である轟然評論にねじこむ、その述語の使用は「制限された外延」の中から認められるべきであるからである (Reich, *a. a. O.*, S. 53-4)。「制限された外延の中の述語の使用は、明かに肯定性を前提としている」 (Reich, *a. a. O.*, S. 54 Anm.)
- (10) Brandt, *a. a. O.*, S. 21.

- (11) Vgl. Brandt, *a. a. O.*, S. 45.
- (12) Vgl. Reich, *a. a. O.*, S. 36.
- (13) 「おひきの判断における与えられた諸認識の連関を、悟性に所属するものとして、再生的構想力（い）の関係は主観的妥当性しかもたない）から区別するなら、私は、判断とは、与えられた諸認識を統覚の客観的統一へともたらす様式以外の何ものでもない」ということを見出す。判断における繫辭『ある』がめざすところは、与えられた諸表象の客観的統一を主観的統一から区別する」とにある。」(B141-2)
- (14) Vgl. Brandt, *a. a. O.*, S. 23.
- (15) 「解説が、概念をアブリオリに与えられたものとして示すならば、その解説はアブリオリである。」(B38)「ある原理が形而上学的と呼ばれるのは、ある原理が次のよつたアブリオリな条件を表象する場合である。それは、ある客觀の概念が経験的に与えられて、いなければならぬよつた諸客觀が、そのもとでのみアブリオリにせらるに規定されうるよつた条件である。」(V181) Vgl. Brandt, *a. a. O.*, S. 43.

（大学院博士課程単位修得退学）

SUMMARY

Über die Vollständigkeit der Urteilstafel in der *Kritik der reinen Vernunft***— Die Interpretationsansätze von K. Reich und R. Brandt —**

Yoshichika MORI

In Kants *Kritik der reinen Vernunft* wird die Urteilstafel als Begründung der Vollständigkeit der Kategorientafel und der Funktionen der Kategorien dargestellt. Die Erklärung der Urteilstafel wurde immer wieder kritisiert. Klaus Reich und Reinhard Brandt bemerken ihren positiven Wert und behaupten ihre Vollständigkeit. Sie sind aber in vielen Punkten geteilter Meinung.

Reich glaubt, dass die objektiv gültigen Urteile erst zustande kommen, wenn Begriffe in der objektiven Einheit der Apperzeption miteinander verbunden werden. Er hält die synthetische Einheit der Apperzeption für den höchsten Punkt, aus dem alle Urteile hergeleitet werden können. Brandt schätzt dagegen die Idee des Systems der Tafel, also die enge Beziehung zwischen der Konstruktion der Tafel und dem Aufbau der *Kritik*.

Dieser Gegensatz fußt auf dem Problem der Begründung des Urteils in den zwei Deduktionen. Reich verwendet die transzendentale Deduktion, um das Prinzip der Konstruktion der Urteile zu begründen. Aber die Urteile der Urteilstafel enthalten nach Reich nicht nur die "Form", sondern schon den "Inhalt". Deshalb setzen auch die Kategorien die Anwendung auf die sinnlichen Anschauungen voraus. Die Reichsche Interpretation beschränkt also die Kategorien auf die Funktion des "Erkennens", und schließt daraus die des "Denkens" aus. Wenn man beide Funktionen in Betracht zieht, muss die Begründung des Urteils in der metaphysischen Deduktion durchgeführt werden, weil alle Momente der Urteilstafel als "a priori gegeben" anzusehen sind.

キーワード 論理学 判断 カテゴリー 分析的統一 演澤論